淋しい二人

水野　仙子

秋が來る。ふとさう思つたゞけでも、もう秋の思ひのわびしさが、忍び足に近寄つてこの心をその薄長くひいた影で包んでしまつてゐる。と秋には胸の傷みやすい記憶が、なんとなくその氣持を臆病にして、人間の望みの勝手さを心に恥ぢながらも、あれほど呪つた暑さにいくらかの懷しさを彩つて譯もなく溜息がつかれる。けれど秋は私に懷しく嬉しいのだ。しんみりした物思ひに耽つて、はてはいつかおろおろと涙をこぼすのもいゝ。何處やら冷たい風と共に來る夕暮れに、肩刺せ裾刺せと鳴きはじめる蟲(むし)の聲……さういつて鳴くのだと昔母は子供達の襤褸(ぼろ)などを繕ひながら私に教へた……に、やがて着るものゝ遣り繰りに思ひを煩はすのもいゝ。

けれどまあ野に出(いで)て見よ。青さの限りを盡した草や木や畑や山や或は森のその自由な呼吸が、如何に高い廣い空にむかつて漲(みなぎ)つてゐることだらう。盛りは最早や凋落を意味してゐる。そら！　ぱつとそこに群雀(むらすゞめ)がたつ。その羽音に搖ぐやうに見える稻の穂の、その傾(かし)げた首のあたりから間もなく青が滅びて行くだらう。秋が來るのだ！　屈強な農夫が二三人シヤベルを掬(すく)つては黒い土を頻りに掘りあげてゐる。

百姓の知識の皆無な私には、それが何になるのかも知らないが、今年の暑さが又焼きつけられたその眞黒な脊中(せなか)に、いつも自分達の及ばぬものに捧げる尊敬の眸(ひとみ)を投げないではゐられない。そこには力や努力が光つてゐる。さうして嚴(おごそ)かな美しさがある。純な自然さがある。あゝ勤勉な彼等を見る怠け者の心の寂しさよ！　それが單にたゞ秋が來るからといふのか？

小さな流れにはちろ〳〵と清い水が流れて、筏(いかだ)のやうに浮かされた障子の骨を飽き氣もなく洗つてゐる。草を踏めば行く先々で蝗(いなご)やバツタが飛び立つて、溝萩の愛らしい花のかげに蜥蜴(とかげ)が消えて行く。木の根に盛りあがつた名もない茸(きのこ)が、早くも半分ばかり朽ちかけてゐるのは如何にも秋らしい。あらゆる草や灌木が入り交つて伸びほうだいに伸びた叢(くさむら)には、早咲きの野菊が一二輪つゝましやかな笑顔を擡(もた)げてゐる。この小さな花の根が占めてゐるほんの僅かな土も、この野の祖先の荒漠とした武蔵野が領したそのまゝのものであるのを思ふと、こゝに幾度ものゝ根が腐れては生え、生えては種がこぼれて又朽ちて行つたかゞ意味深く考へられる。それが自然だといふ。そんならば誰が一體その自然を支配するのだらう？　草や樹やそれらは皆おの〳〵自分自身の意志によつて生え花咲き枯れて行くのだらうか？或は又、自然が自然自身を支配するといふのか……？

私はふつとこんなことを思ひ出す。ある春の日の日曜に――それはもう四五年前のことであつた。私の友達が属してゐたある小さな教會の人達が、十人あまりの日曜学校生徒を連れて郊外授業に出掛けたことがあつた。私が友達と二人でゐた家は丁度その通り路になつてゐた。で私も亦友達と一緒にその一

行に誘はれた。さま〴〵な階級から集つてるらしい子供達は、みんな樂しさうに唄つたりしやべつたりしながら、この一行のうちでたゞ一人の男であるRといふ青年に連れられて先に立つてゐた。この青年はまだA學院の生徒で、日曜毎にこの教會の子供達を教へにやつて來るのであつた。一番脊の高い身輕な洋裝のミスSを中心にして、菓子の包みや、湯沸しや茶碗などのはいつた籠などを下げた婦人達も、たわいのない話に耽りながら子供達の後について行つた。

柔かな若葉の色にみちた林は、ふくらみのある春の光りを浴びて靜かな沈默をまもつてゐた。あちらの樹に倚りこゝの草の上に腰を下し、驅けたり飛んだり暫くは林の中にさゞめきが滿ちわたつた。間もなく子供達は聲から聲と仲間に呼び傳へて、青年の立つてゐる樹の下に來て一塊りになつて坐つた。その聲を聞いて婦人達もみなこちらに集つて來た。一頻り子供達の圓ゐの上に身動きやさゝやきの波が搖れた。とそれがRが改つた顏をして立ちあがつたのを合圖にぴたりと靜まつた。

「皆さん！」と彼は取澄した顏に強いて優しさを泛べて子供達を呼びかけた。私は彼が先刻一人婦人達に脊中を向けて、とある樹の根のところで草か何かを手遊びにしながら何か考へるやうな風をしてゐたのを知つてゐた。その時から、まだ耻し盛りの彼がこんな婦人達の前でどんな容子をしてどんな教へぶりをするだらうかと大へん好奇心になつてゐた。で案外この平氣な慣れた調子の態度を見ると、一寸同情をし過したやうな當てが外れたやうな氣がした。

「これは大へん綺麗な可愛らしい花ですね、皆さん。」と彼は言葉を次いだ。みんなが一樣に彼の手許を

見上げた。彼はその見事に發育した腕を擡げて、指の先に摘んでゐる小さな名もない草花をにこ〳〵しながら顔の前に翳して見せた。

「この花はどうして出來たのでせう？　どうしてこんなに愛らしく綺麗に咲いてるのでせうね、誰か知つてる方はありませんか？」

子供達は今や熱心に正直にその答について考へはじめた。暫くはみながみな默つてゐる。實をいへば私はその時その間の意外なのに――私にとつては――驚いて、そして内心非常に不安であつた。何故ならば私自身がその問に答へるすべを知らなかつたからである。

「誰がお作りになつたものでせうね一體。」と彼はづらりと子供達を見廻して促すやうに言つた。すると年かさの一人の女の子がついと起つて、

「それは神樣がお造りになつたのであります！」と言つた。

「えゝさうです〳〵。この花は神樣がお造りになつたのですね。」と青年は滿足さうに頷いて、休めの姿勢をしてゐた足を眞直ぐに直した。

それからどんな話になつて行つたのかはよく覺えてゐない。私はたゞ擔がれたやうな腹立しさから反感を持つてその後の話を聞いたやうであつた。といつて私は決して、この花がどうして出來たか、誰が造つたかといふことの答へが別にあつたわけではなかつた。さういふ疑問を起したことすらもなければ、從つてまた考へてみたこともなかつたのである。葡萄畑は生れながらにして自分のものだと思つてゐた。

誰が與(あた)へたのでも貸したのでも、また誰の意志でさうあるのでもないと思つてゐた。有るものは有り、無いものは無く、有が無になつても、無から有が生じても、そこに決して哲學的な疑問が起らうとはしなかつた。丁度水すましのやうに、流れの表面だけで生きて行かれる人間に屬してゐたのだ。その頃の私は。

――今頭を掠(かす)めて飛んで行つた小鳥が、見送る間もなく楢の林の繁つた葉の中に消えて、林は再びひつそりとした靜かさにかへる。小笹(をざ)の根を分けてその靜寂の中に足を踏み入れると、たちまちに起る足許のざわめきが、林の中に響きわたるかと思はれるまでに耳だつて、それがまた踏みしめたまゝに暫く耳をすますと、葉と葉の呼吸が聞えもするほどに靜まりかへつてゐる。さてまた一足を拔く、そこにはさや〳〵ざわ〳〵と葉擦れの音が伴ふのである。樹の間の奥は稍々(やゝ)低く靑さに蔽はれて薄暗く、今や身を包んでゐるすべては靑い衣を着た沈默の自然である。照りかけた日が樹立の切れ目からさし込んで、そこら一帶を明るくしてゐるところに立つて上を見上げると、なんといふ靑い高い晴れ渡つた空の廣さだらう？　たゞ〳〵溜息がつかれて後ろに目を伏せると、又してもそこに一つの驚嘆が私を捕へる。櫨(はぜ)の一種らしい廣葉樹の若木の一枝が、早くも魁(さきがけ)に紅葉(もみぢ)して、全く眞赤(まつか)になつて背後から來る日に輝いてゐるのだ。鮮(あざや)かと言はうか、冴えたといはうか、いづれにしても色そのものがすでに生きてゐるのだ。この冒し難い自然な精巧の前に、誰かよく人間の技術を競ひ得ようか？　そして誰かまたこゝに人間の萬能を誇り得ようか！

さてそれならばお前は今こそかの漸く人の目に觸(ふ)れるほどの草花も神の造り給ひしものとして信ずるか？　私はたゞ默(もだ)す。私の頭にはたゞ幾條(いくすぢ)ものダツシユがあるばかりである。それはたゞ私が神の實在を信ずると否とによつて決るのである。私は神の全智と全能とを信ずる。私にとつてその神を信ずることは可なり容易(たやす)いことである。たゞ、その實在を信ずることは……矛盾してるやうだけれどもどうも仕方がない。つまり私がまだほんたうに神を信じてゐない證據(しようこ)なのだから……どうも覺束ない。信じ切るには如何にしてもその存在が不確に思はれてならないのである。或は吾々はそのやうなことを思議したり推定したりしてはならないのか知れない。私は見えざる神を畏れてゐる。さうして知らざる神に祈るまいとしても祈らずには居られない祈りを捧げ、信ぜずにはあまりに闇であり迷路であるこの世のために神が實在であらんことを希(こひね)つてゐる。けれど私はこの耻しい不信仰のために決して奇蹟を乞ひはしないであらう。何故なれば私の心に動かすべからざる信仰のわく時、そこにはもうすでに神が確立してゐるからである。

さまよいからさまよひに、心は野に吹く風の如くにはてもなくひろがつて行く。夕暮れは私の踵(きびす)についてしづ〳〵と後を追うて來る。私は今小高い丘の上に恰も一本(ひともと)の杉の如くに立つてゐる。暮れかけてゐる水の面をもつた靜かに小さな池が私の前に澱んでゐる。水の面には無數の波紋が消えては描(か)かれ消えては描かれしてゐる。雨だな――ふと心にさう思つた時のことが思ひ出されて來る。それはいつかAといふ友達と共にこゝに來て話した時のことであつた。

私は突然言つた。

「さつきからあのちら〳〵してる波紋を雨が降り出したのだと思つてなんだか心が落ち着かなかつたけれど、雨ぢやないのね、水すましか何(なん)かゞ歩いてるのね。」

話の腰を折られた友達はふつと口を噤(つぐ)んだ。さうして池の面に目を注いだ。

「えゝ私も。」

それにしても雨がよく顔にふりかゝらないなどゝ思つてゐたほど二人は心を奪はれてゐた。Aは暫時ぼんやりして水面を見つめてはゐたものゝ、やはりすべての注意が自分自身にのみ集つてるものゝやうにすぐ又言葉を次いだ。

「私は今幸福なのですよ。」

私は丘の傾斜に横たへてゐた體を半分あげて友達の眼をみつめた。

「ぢやあなたはほんたうに（と力をこめて）Iさんを愛してらつしやる？」

「えゝ。」とAの眼は熱つぽく潤んでゐた。

「それぢやあ幸福ね。」

私は再び起した體を草に伏せた。さうして眼の先の草をつまみながらなんだか淋しかつた。

さうだ、私はまだ全くあの人を愛し切つてはゐないのだ！　少くも自分があの人のために理想して備へてゐる愛の甕(もたひ)はまだ滿たされないのだ。その空隙(すきま)から二人の寂しさは來てゐる。あの人も寂しい。私

もさびしい。お互がその寂しさを胸に抱いて、お互がようくそれを知りあつてゐながら、決してそれを口にしない二人の寂しさ！

「IさんとKちやんと、それからMさん御夫婦を除いちやあ、私達の周圍のうちでは私達が一番ほんたうに愛しあつてるわね。」

「むゝ。だけどI君二人を特別に擧(あ)げたのはどういふ譯だい。」とあの人は笑つてゐる。あの人も私の言ふ意味が比較級であることをよく知つてゐる。暗默のうちに二人の愛の空隙(くうげき)は覗かないことに同意しあつてしまふ。私も淋しく笑つてゐる。嘘つき！

今、自らの心に自ら唾きせられて私は唇(くちびる)を嚙む。では私はその愛の理想を壞してしまふべきだらうか？　さうしてもつと恰好な小さい壺を用意すべきだらうか？　それは容易いことだ。若しも私達が豚の生活に（偉大なるトルストイの言葉を借りていへば）滿足することが出來さへすれば！　さうすれば今の私達は愛の完成者の最上級以上の者であるだらう。

しかし寂(さみ)しさよ、私はお前を歡迎する。お前は私に何が足りないかを、一體何を要求すべきかを敎へてくれる。私を高い理想に導いてくれるのはお前だ。お前はその磁石の針を今私達の愛の空隙(くうげき)に向つて指してゐる。例へそれが滿たされ埋められる時があるとしても、その時にはまた外の缺陷(けつかん)の方向にお前のその針を向けるであらう。お前は私達の――人間の一生の伴侶である。考へてみればお前はすでに私達が結合の最初に於てすぐにその姿を見せてゐたのだ。どんなにあり時の驚愕と恐怖とが限り知られな

い寂(さみ)しさとなつて私の胸に喰ひ入つたらうか。――私は見たのだ。あの人がある女に申込んだ結婚を承諾してあるその返書とそしてあの人の日記とを――私は初めて眞の怖れを知つた。私はそれから幾日かの間、二年後に實現すべきであつたその結婚のために、如何にこの邪魔者の自分を取扱ふべきかに思ひ惱んだ。私達はその時はもう公けに結婚をしてしまつてゐたのだ。しかし人は今あの人を不德のそしりをもつて責めてはいけない。何故なればその事はたゞ單に私の一生に寂(さみ)しい影を投げて過ぎた形骸に過ぎなかつたのだから。あの人は戀に破れてゐたのだ。さうして私はあの人を容(ゆる)さなければならなかつたのだ。

私達は結婚の華かさを知らない。最も美しい夢の回顧であるべき筈のその頃が、涙ぐまずにはふりかへられないほどわびしく寂(さび)しいものであつた。たつた二人だけがこの世の中に取り殘されたやうに、お互がお互を胸の中に憐れみ合ひながら、ともすると默り合つて坐つてゐた。何一つとして思ひ煩はずにはゐられなかつたのだ。結婚後三月とたゝぬ間にあの人はふと胸を病み初めて床に就いてしまつたのだもの――。

それは私にとつて二度目の打擊であつた。さうしてそれは又あの人の精神を半ば永久的に打碎いてしまつた。氷のやうに冷酷に迫つて來る前途の悲觀は眞暗な絶望の底へとあの人を投げ入れた。あの人の顏は曇り、そして絶えず物思ひに耽つた。あの人の私を憐れむやうな許しを乞ふやうな眼が私の顏に濺(そい)がれる時、私はわざと目を外(そら)さないではゐられなかつた。私の劬(いた)はるやうなまた憐れむやうな眼があの

人の曇つた面(おもて)に落ちる時、あの人はまたやはりあらぬ方にその眼を外した。決してその二つの目がかち合つてはならなかつたのだ。涙を伴はずには、震ひ聲とならずにはすまされなかつたから。

「何か話をしておくれ！」とあの人は堪らなさうによくさう云つて私を促した。

「むかあし、むかあし、あるところにね。」

「……」

「んとか何とか返事をしなきやあいや。」

「むゝ。」

「お爺さんとお婆さんがあつてね、ね。」

「……むゝ。」

「お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へお洗濯に……。」

私は附元氣(つけげんき)を出してふざけたやうにこんな話をし出す。けれどあの人の顔色を絶えず窺つてゐるその注意は、やがていつの間にかもとの暗い寂(さみ)しい氣持に二人をひきずつて行く。——

茶の間の窓の外に僅かに殘つてゐる楢林はすつかりもうその葉をふるひ下(おと)して、じくぐくと冷たく降る雨がわびしく樹の枝々を打つてゐる。そんな日には雨戸を閉してゐるので家の中が殊に暗い氣分で滿ちた。小止(をや)みもなく雨は降る。出來るだけの儉約をする積りで、この二三日何も取らなかつたせゐか、その日は肉屋も魚屋も顔を見せなかつた。夕餉の支度のために臺所に出てみると、干乾びた葱の二三本

だけが籠に殘つてゐる。私は暫く考へてのちに、一寸買物に出て來るからと言ひ置いて、蒲團の四隅を叩いて、そして傘をさして表に出た。雨は横しぶきに冷たく吹きつけて、一丁と行かぬ間に袖といはず裾といはずに濡れそぼる。通りに出て兩側の店屋を見廻しながら行くけれど、歩いても〳〵肉屋の店が見つからなかつた。その時分の私は家事は愚かまだ買物にすらも馴れてゐなかつたのだ。溝から溢れて往來を走り流れる水が足駄を洗つて行く。にぎりしめてゐる傘の重味に疲れて冷たい汗が私の背中を濕(うるほ)した。やう〳〵のことで一軒の鳥屋を見つけてそこにはいつた時には思はずほうつと息がつかれた。

探し〳〵歩いてるうちはさほどにも思はなかつたけれど、歸り途の遠さによほど時間も經つてゐることが知られた。こと〳〵と臺所に音をたてながら私は濡れた袂や袖をしぼつてあがつた。家の中はもうすつかり暮れ切つてゐる。燈火(あかり)の影は何處からもさしてゐない。私は何となく胸を騷がせながら座敷の方に急いだ。

「カーチヤかい。」

「えゝ。たゞ今、どうも遲くなりました。」

あの人は薄暗い部屋の中にしよんぼりと床の上に起きかへつて、掻卷の襟の中に深く埋めてゐた顔を薄白くこちらに向けた。

「カーチヤはもう歸らないのだらうと思つてたよ。」

私は足がなよ〳〵となつた。靜かにその空想の諦めてゐたやうな、また恨めしいやうな悲しいやうな

さうしてまた安心したやうな詫びるやうな、その複雑な一言は、今も猶私のこの胸にしみ込んでゐる……。私はものをもいはず自分の體をあの人の膝の上に投げてそしてむせび泣いた。あの人も默つてその力の萎えた腕で私を抱きしめた。熱い涙がぽとり〳〵と私の顏の上にふりかゝつた。――

それからもう四年は經つてゐる。さうして私達は絶え間ない惱みと寂しさのうちに僅かに老いた。ある時は家具の半ばを賣り拂つて海岸の藁葺屋根の家にわびしい冬を送り、ある時は絶望的な私の放埒からあの人の魂を此世の地獄においた。しかしそれもこれもみんな過去だ。吾々の成長の醜い脱殼だ。ただ寂しさが……人間と人間の結合に於てどうしても免れることの出來ぬ寂しさが、吾々の生活の影となつて過去現在未來を一貫する。けれど二つのものが一つとならなければならぬ場合にも猶、二つが二つであつて滿足の出來る人はもとより此限りではない。ではその二つのものが一つとならなければならぬ場合とは？　キリストは言つた。元始に人を造り給ひし者は之を男女に造れり。此故に人父母を離れて其妻に合二人のもの一體と爲るなりと云へるを未だ讀まざるか。さればはや二つには非ず一體なり。神の合せ給へるものは人これを離すべからず。（馬太傳第十九章）

今人が假りにキリストの言葉に共鳴を感ぜず、神の合せ給へるものなどゝいふ言葉に可笑味を感ずるとしても、猶夫婦の心に潜んでゐる情は殆ど無自覺に二つが一つであるべきことを要求するであらう。それが愛の理想である。さうして二つが一つになり得た時に初めて愛は完ふされる。常に眞に人を愛したいと願つてゐる者にとつて、いゝ加減な程度の愛は全く忍ぶことの出來ぬ耻辱であり苦しみである。

しかもそれは人に望まれないばかりでなく、また自分にも望まれないのだ。

おゝ汝私の自我の影よ。どうかその冷たい翼を二人の魂の微妙な融合に觸れさせないでおくれ。私は全然お前を拒まうとはしない。たゞどうかお前の居るべきところにだけ居ておくれ。お前は出しやばつてはいけないのだよ。輕卒にその翼をふるつてはいけないのだよ。お前は心を博く持たなければならない、さうして鷹揚でなければならないのだよ。たゞ私が他から侵略される時にお前は私を護ればいゝのだ。それがお前の享けて來た本文なのだよ。それともお前はどうしても私があの人の魂に喰ひ入ろうとするのを妨げようといふのか？　お前よ、私だとて勿論あの人の愛がより純により積極にあるとは思つてゐないのだよ、悲しいけれどさう思ふことが出來ないのだよ！　けれどそんなにもあの人の如何がお前に關係あるのだらうか？

あゝ、私はあまりに自分達の私事について語り過ぎた。あまりに私の惱みや寂しみに思ひを寄せ過ぎた。今はもうその秋ではない。吾々はもはや個人主義の冷たい墓場を出なければならないのだ。さうして私は私の女性の意識からも一歩を！　今、世界はその半土をあげて人と人とが相戰つてゐる。同胞と同胞がお互の血を流し合つてゐる。さうして實に吾々も亦その同胞の一人であるのを思つた時に、自分達は一體どうすればいゝのだらう？

爲さなければならぬこと、爲すべきことは、私の力からこの現在の生活からあまりに遠くかけはなれてゐる。さうしてそれを意識することの遣瀬なさに耳を掩ひ眼を蔽ふべく私の心は馴らされてゐる。私

は隱れ家と味方を藝術に求めようとする。さうして渴いた者が水に對(むか)ふやうな心持で偉大なる藝術家達の手になつた戯曲や小説やに目を曝す。けれども見よ――お前の隱れ家と味方はよくお前を卑怯と弱意志の安易に保護したか？　お前は常に眞理の爲めの勇敢な戰ひを戰つてゐるそれらの主人公が踏んでゐる嶮(けは)しい道に、彼等の蹠(あしのうら)から流れる生々しい血潮を見なければならなかつたではないか？

――險惡な天候は益々彼の身に迫つて來る。群衆は彼に石を擲(なげう)ちながら罵(のゝし)りつゝ彼を去り、彼は群衆を見棄てた。彼はよろけながら滴る血潮を雪の上に染めて氷の山を辿つて行く。彼は神の生活のために強大な意志をもつて猶も「一切か！　無か！」を叫んでゐる。――かゝる時にブランドはもはや私にとつてイブゼンの假空の人物ではないのだ。

又私は「もし氣をわるくするやうなことがあつたら許しておくれ、俺はそれを言はないではゐられないのだから。」と（光は闇に輝く）の主人公が、華かに音樂を談じあつてゐる若者達の部屋の前で、農民の生活のみじめな有樣を説くのに心を打たれなければならない。彼は終に虚僞と贅澤の罪惡な生活に堪へられなくて、妻が催してゐる舞踏會の音樂を微かに耳にしながら、今テーブルの上に一通の手紙を置く。――彼は此家(このや)を立去らうとしてゐる。

私の胸は痛みはじめる。彼等の強い意志と真摯な努力とのために、あまりに強く心の緒が張り切るからである。彼等は私達がその日〳〵を妥協に濁してゐる生濕(なまぬる)さに堪へられないのだ。さうして彼等の惱みはもはや悲痛を絶してゐる。

それにしてもなんといふ私の心の空虚(うつろ)なことだらう！　實らずに熟した果實のやうに、私の興奮は間もなく腐れて地に堕ちる。私は私の言ふことに氣耻かしく、自分で自分の爲(す)ることに面(おも)はゆい。みんな中がからつぽだからだ。あゝしなければならない、かうなければならないと私は常に自分自身にむかつて、理想を叫んでゐる。しかも何といふその聲が寂(さみ)しくうつろに響くことだらう。あゝ、すべての私の空叫(からさけ)び！併し私はそれを決して徒(あだ)な仕事にはしないであらうよ。

夕日の影は早くも遠い森かげに消え去らうとしてゐる。今の今まで熱ある血のやうに輝いてゐたその光りは、私が考へに追はれてそのことに言ひ及ぶ間もなく速(すみや)かに沈みつゝあつたのだ。空はまだばら色の光りのうちに殘つてゐる。けれども薄明は微かに少しづゝ私の背後から野を窺(うかゞ)うて來る。

「私達は道に行き暮れた旅人であつてはならない。」私は心にかう呟きながら徐(おもむ)ろに踵をめぐらす。あの人は今頃漸く喰べるための辛いその仕事から放たれて歸り途になるだらう。さうして二人の寂(さみ)しい夕餉のために私は家に急がなければならない。――

【入力者注】

底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本と改行を合せるために、句読点のフォントサイズを小さくした箇所があります。

以下の修正を加えました（数字は底本の頁-行）。

80-7　盛りがあつた　→　盛りあがつた

83-12　櫨（はじ）　→　櫨（はぜ）

83-13　黄葉樹　→　廣葉樹

底本：「新潮」大正四年十月一日發行
テキスト入力：小林　徹
公開：令和四年四月二十五日

リンク：水野仙子作品年譜
水野仙子ホームページ